

はじめに

当行の母体となった六十九銀行、長岡銀行の設立をみると、その創業は遠く明治時代にさかのぼる。

六十九銀行は、戊辰戦争の余燼がいまださめやらぬ長岡において、地域産業の興隆と民生の安定を図るため、明治11年12月20日、第六十九国立銀行として創業した。そして、国立銀行としての20年間の営業満期を前に、31年1月1日、株式会社六十九銀行として新たに発足した。

一方、長岡銀行は、日清戦争後の折からの企業設立ブームのなかで、長岡に銀行をもう一行新設しようとの動きが起こり、29年11月10日創業した。

こうして誕生した両行は、大正末期から昭和初期にかけて、13行もの諸銀行を合併あるいは買収し、規模を拡大していった。

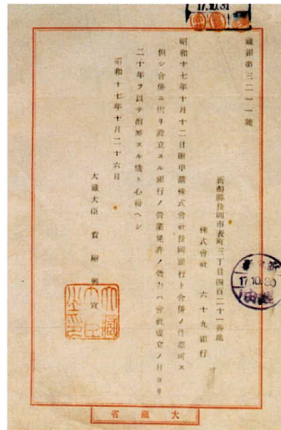
そして、昭和17年12月7日、六十九銀行と長岡銀行は対等合併し、長岡六十九銀行を新たに設立した。

その後、23年、商号を北越銀行と改称し、日本経済の躍進とともに業績も大きな伸びをみせた。しかし、当行のこれまでの120年にわたる長い道程を振り返ると、決して平坦なものではなかった。

当行では、すでに『創業百年史』で100年間のあゆみを詳述、『北越銀行史－110年のあゆみ－』でその後の推移を記録したが、今回、その後の激動の10年間を加えて、『北越銀行史－120年のあゆみ－』として刊行することにした。

したがって、序編では、これまでのあゆみの詳細は既刊の各年史に譲り、どちらかといえば、簡略にし平易に読みやすくすることを心掛け、110年間を振り返った。

本編では、平成時代を迎え、金融の自由化・国際化のいっそうの伸展、バブルの発生と崩壊に伴う、経済・金融情勢の激動と構造改革の進展下における最近10年間のあゆみに主力を注いだ。



六十九銀行に対する合併許可書



長岡銀行に対する合併許可書

河井継之助の理財力と銀行家外山脩造

北越戊辰戦争に際して長岡藩の軍事総督として開戦を決めた河井継之助は、慶応元年10月に郡奉行に任じられ、翌々年には家老職に就くという異例の昇進をした。その背景には窮迫した藩の財政を立て直し、藩を富強の方向へ導こうとした理財の才が11代藩主牧野忠恭に認められ、その厚い信頼を得たという状況があった。

司馬遼太郎は『峠』で河井のいわば商人としての一面に触れている。幕末、江戸における長岡藩邸の整理

に際し、河井は、長岡藩の家宝・什器などを売り払い米穀と銅貨に換え、艦船で帰藩の途中、米穀は米のとれない函館で売却、銅貨は良質の銅銭不足であった新潟で両替し大儲けをしたことを述べ、彼の商才を描写している。

河井は非常の備えとしては当時の標準通貨である銀がかさ高で重く不便であるとして、銀に代えて金を蓄積し、1万両入りの箱を新造して収納、城中に保管しておいたという。慶応4年7月の再度の落城の際にはかなりの額の正金を村方へ預けておいたので、それが戦後の藩再興に役立ったともいわれている。このような蓄財は長岡町の太刀川（佐次兵衛、問屋商人で藩の御金方として士分の扱い）や栃尾町の伊勢屋（商人、田村家）などからの調達もあったと思われる、それには彼が兄事していた藩医小山良運の口添えなどもあったらしいことが、彼の良運あての書簡によって察せられる。

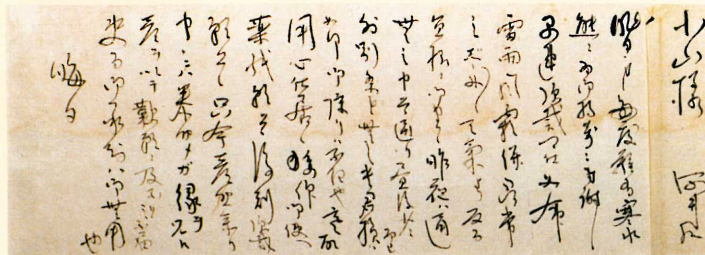


北越戊辰戦争時の長岡周辺東西両軍の布陣絵図

彼がいわば従者として常に随伴させていた人物に、いずれも栃尾組の割元家の出である、彦助（来伝村、大崎家）、泰助（一ノ貝村、諏佐家）、寅太（小貫村、外山家）の3人がいた。なかでも寅太は負傷した河井に付き添って会津へ赴く途次に、河井から商人として生きることがこれからの早道だ、と教えられ、のちに銀行家外山脩造として大成した。

明治10年秋、当時大蔵省銀行課に出仕していた外山は、第六十九国立銀行の創立に際して小林雄七郎（小林虎三郎の弟）とともに三島億二郎に協力した。明治15年には、日本銀行理事兼初代大阪支店長を務めたが、のちには関西で実業家としても雄飛した。まさに、河井継之助の才気、ことに理財の才識を継承した人物といえよう。

注：割元 庄屋と代官の中間にあって、年貢の割り当てなどを行う。大庄屋と同類の当時の村方をおさめる組織。



小山良運あて河井継之助書簡